



デジモンテイマーズ

第24話

旅立ちの日

第三稿

子ども達の装備描写付加等

脚本ノ小中千昭

Animation Play by Chiak J. Konaka

2001ノ05ノ21

前話リプライズ

断片的モニタージュ（スローモーション）。
音声は抑圧的なノイズと巨獣の咆哮のみ。
暴れるヴィカラーラモン
叫ぶタカト、留姫、ジエン。
メガログラウモンの咆哮。
ヴィカラーラモンの量子分解
マクラモンに連れ去られるクルモン――。

――溶暗

明治通り／数日後／午後

花園神社の蝉時雨れ。

タカト「（モノノ淡々と）僕たちの町――」

ヴィカラーラモンによりズタズタになった明治通り。
巨獣が分解した三叉路はクレーターになっている。

タカト「（モノ）僕たちの世界――」

テレビの中継車がそこでレポートをしている。
平和な青い空――。数機の取材ヘリ。

と――、ヴィカラーラモンが侵攻した明治通りの上
空に、ゾーン・テキスチャーのキラキラした裂け目
が陽光に反射したかの様に塵気楼の如く現出。

タカト「（モノ）僕たちの知らない世界――」

しかし、すぐに消えてしまう。

サブタイトル

松田家／夜／居間（以下、音声はオフ処理）

俯いて座っているタカト。

相対して座り険しい顔で問い詰めている父親。

立ち上がって激情をぶつけている母親――。

タカトはただ黙っている。

タカト「(モノ)僕は、とつても親不孝だ」

中央公園西端／治水工事現場入り口

同ノ内トンネル

オレンジの照明に浮かぶ、ギルモンの影。

ギルモン、トンネル内に進んできて、小首を傾げ

ギルモン「……(ここには無いや)」

トンネル内に、かつてあった『ゾーン』は無い。

出ていくギルモン。

夜の新宿／東口繁華街

何事も無かったかのように、人で賑わう街。

ビルとビルの間暗がり、影を引いて素早く移動するレナモン。

ビルの屋上

給水塔脇に来て、見回すレナモン。

レナモン「……」

ここには無い、と去る。

留姫の部屋

沈痛に見つめている祖母。

留姫の母親、留姫の肩を抱いて泣きじゃくっている。

留姫は困惑している。母の気持ち、判るから。

留 姫「――」

窓外の暗い空を見上げる。(音声オフここまで)

李家のあるマンション

秋の虫の音が包んでいる。——ノックの音。

鎮宇の部屋

二台の大型液晶ディスプレイ、「Linux」上で蛋白質組成解析プログラムが動作中。ドアに振り向く鎮宇。テリアモンを頭に乘せたジェンが立っている。

ジェン「——お父さん……」

鎮宇「——アークを見せてくれないか」

ジェン「——デジヴァイスの事？」

ジェン、父親の近くに行つてDアークを見せる。

受け取つた鎮宇、撫でながら

鎮宇「——未来の子どもたちは、アークでデジタル・モンスターとコミュニケーションしたり——」

テリアモン、耳をぴよんと上げる。

鎮宇「ネットワークのデータベースからどんな物語や知識も引き出せる様になる——。私たちはそう夢想していた」

鎮宇、Dアークのボタンを操作。

ぶん。円形の仮想ウィンドウが開く。

鎮宇「——（微笑）テリアモン」

テリアモン「なあに？」

鎮宇「夢で見たものが、現実にもそこに存在する。そういう驚きや喜び、君たちにも判るのかな」

テリアモン「……」

鎮宇、Dアークをジェンに返し

鎮宇「誰かは判らないが、デジタル・モンスターを飛躍的に進化させ、アークを現実に出現させた……」。

若い時の世界中の仲間が今、再び集まって力を合わせている。もう、君たち子どもにも危険な戦いをさせたくない」

ジェン「（俯く）——ぼく——」

パタパタとスリッパの音が廊下からして——

小春「おとーさん」

ぱっ、と耳を硬直させるテリアモン。

小春、テリアモンの耳を引っ張りながら

小春「お母さんがスイカ切ったよー。食べよ食べよー。テリア
モンも食べるー？」

テリアモン「……」

鎮宇「判ったよ小春。今行く」

小春、スキップしながら出ていく。

ジエン「——お父さん、僕……」

鎮宇「（微笑）はつきり言葉で言える時に言いなさい。さあ、

スイカを食べよう」

立ち上がりドアへ向かう鎮宇。

ジエン「……（呟く）今じゃないと……」

小料理屋「縄のれん」（樹莉の親の店）

中から酔客の笑い声が聞こえてくる。

酔客「おっ、樹莉ちゃん勉強かい？」

同/店内

二階から降りてきた樹莉、客にっこり。

樹莉「おじさんこんばんは」

厨房の夫婦、チラと樹莉を見て

父親「店に降りてくるなって」

樹莉「うん。ちよっと」

樹莉、冷蔵庫を開け、ジュースのパックを出す。

二階/樹莉と弟の部屋

暗い部屋に入ってくる樹莉。二段ベッドの下で眠っ
ている幼い弟。そっと顔を覗いた樹莉、窓へ向かう。

屋根の上

壁にもたれ、店舗の屋根の上に座っているレオモン。
その脇に、犬ミトンが出てきて

樹莉「わん」

レオモン「……」

店舗の屋根に降りる樹莉。

レオモンに並んで座り、ジュースを渡す。

樹莉「はい、レオモン様」

レオモン「様はよせ」

樹莉「(クスクス) はいはい」

横に座る樹莉。住宅街の屋根の向こうに、高層ビル。レオモン、ジュースの匂いを嗅いで、警戒しながら少し飲む。

樹莉、Dアークを掌で包みながら

樹莉「——レオモン、どういうところにいたの？」

レオモン「——どう、と言われても」

樹莉「この世界とは、全然違うんでしょ？」

レオモン「(ビルを見つめ) 違う。でも、似ているところもある」

樹莉「——あたしたち、そこに行くの。探検に行くの。凄い事よこれって。だって誰もそんなところ、行った事無いんだもの——」

懸命に自己を奮い立たせようと、強がる樹莉。しかし言葉尻は微かに震え——、唇を噛んで俯く。

レオモン、じっと樹莉を見つめ——、手を触れようとして——、その手を下げる。

レオモン「——私が今は、パートナーだ。そうだろう？ 樹莉」

樹莉、目をまん丸くしてレオモンを見つめる。

樹莉「(微笑) そう……、あたしがあなたのティマー。だから——お願いがあるの……」

レオモン「——」

タカトの声先行オフ「(小声) ——どうしても、見つからない？」

タカトの家ノ居間

電気の消えた部屋でうずくまって受話器を持ち

タカト「——そっか。判った、ありがとう。明日は僕も探す。大丈夫。きつと見つかるよ」

留姫の家／廊下

子機を耳に当て、壁にもたれていた留姫。

留 姫「うん……。そんじゃ」

ツー、ツー。スイッチを切る。

留 姫「——（小さく吐息）」

廊下の暗がり立つレナモン。

レナモン「ヴィカラーラモンの影響も、そろそろ消えてきている。

早く『入り口』を見つけねばならない」

留 姫「そうだね——」

レナモン「——留姫」

留 姫「何」

レナモン「私は留姫に行かせたくない。我々デジモンだけで行くべきだ。あそこは我々の世界なのだか——（ハッ）」

廊下の向こうに立っている留姫の祖母・聖子。

留 姫「おばあちゃん……」

やや狼狽したレナモン、下がるうとして——

聖 子「待ってちょうだい」

レナモン「——」

聖 子「——（微笑）この家、あたし好きじゃなくなつてね。古いばかりで、陰気で、こんな家、真っ先に出てやる、つて、あたしが留姫くらいの歳の時には思ってたわよ」

留 姫「……」

聖 子「だって、まるで何か出そうじゃない、この家（悪戯っぽく笑い）」

留 姫「知ってたの？ レナモンの事」

聖 子「——お狐様が留姫を護ってくれている、ていうのも、ちょっと違うみたいね」

レナモン「——（深く頭を垂れ）レナモンと申します。ずっとここに世話になつていながら失礼の段、お許し下さい」

聖 子「（微笑）レナモンさんというの。とても美しい姿だわ」

レナモン「——」

留 姫「——ママには絶対判って貰えない……」

聖子「あの子は超現実的だけど（苦笑）、でも、時間をかけてちゃんと話せば聞いてくれると思うわ」

留姫「——時間が、もう、無いの」

聖子「——危ない事、しないで」

留姫「——」

聖子「これは、勝手なあたしの希望」

留姫「——」

聖子「だけど、レナモンさんが留姫を護ってくれている。そう
なんですよ？ だったらあたしは安心……」

レナモン「——私の命に代えて、留姫様はお護りします」

ハッとレナモンを見つめる留姫。目が潤んでいる。

聖子「（寂しそうに笑み）——お願い、します（頭を下げる）
留姫「——ごめん、なさい……」

淀橋小学校付近／朝

坂道の多い入り組んだ路地——。

登校途中のヒロカズが、ケンタが、そこを覗いて回っている。

中央公園／ギルモン・ホーム前

タカト「ギルモン、おはよー！」

ホームに駆け込んでいく。

ギルモン・ホーム内

タカト「あれ……（不安）ギルモン……？」

無人のそこに佇むタカト。

と、反響を伴ったギルモンの声。

ギルモン「（オフ）タカトー」

タカト「？」

ギルモンが掘った縦穴を覗き込むタカト。

タカト「ギルモン！」

5 m程の縦穴。その底でギルモンが見上げていた。
ギルモン「こつち降りてきてよ」

タカト「え？」

縦穴の底から、ギルモンの背程の横穴が伸びている。
降りてきたタカト

タカト「こんなに掘つちやつて。どうしたのさギルモン」

ギルモン「見てみてよ」

タカト「見てっ、て……」

ギルモンが差し伸ばした爪、量子化し、ぼんやりと
なっている。

タカト、ハツとなって爪の先、横穴を覗き込む。

タカト「あっ！」

穴の奥、10 m先に、小型のゾーン。

ギルモン「ここにあったんだよ。ギルモンが住んでるところにある
なんてびっくりでしょ」

タカト「——（呟く）ほんとに、びっくりだ……」

カメラ、ゾーンの中へ——

ゾーン内

光と闇のマーブル、混沌の世界（イメエジ）。

凄まじい速度で視点移動。

現れては消える、デジタル・ワールド内の点描（は
つきりと見えない）。

遠くから聞こえてくるマクラモンの嬌声。

クルモンを抱いたマクラモンが高速で降下していく。
クルモン「くるる〜〜〜っ！」

混沌。

四肢をダランと伸ばし、ゆっくりと下降していくイ

ンプモン。

インプモン「(薄目を開け)——俺は——何が間違ってたんだろ
う……。強くなりたい、そう思う事がいけないのか？

俺は——、所詮ただのデータ……。こつちの世界がお似
合いつて事かよ……。情けねえな……」

混沌に消えるインプモンの姿——。

淀橋小学校ノ教室

蝸の声。

奈美、黙々と国語の教科書を朗読している。

タカト、強い顔で窓外を見つめていた。

ノートには落書き。稚拙な異世界の図。「クルモン」
「進化」「デジタルワールド」等の文字。

と、脇に立つ奈美。

タカト「(ハッ)」

奈美「そんなにあたしの授業、つまらない？ 退屈？」

タカト「——」

奈美「タカト君はいいのよ、それでも。だけどあたしが困るの。
学力テストであたしのクラスの平均点下げられるのは」

タカト「——ごめんなさい」

奈美「——放課後、反省文書いて。(背を向け教壇へ向かい)
いい加減すっかりしてよ、五年にもなって——」

樹莉「(オフ)先生」

奈美、振り向く。

樹莉「(立ち上がり)あたしも落書きをしていました」
タカト「！」

樹莉は真っ直ぐ奈美を見つめている。

タカト「加藤さん……」

とヒロカズも立つ。

ヒロカズ「俺も落書きしました」

ケンタ「(立ち)あ、すいません僕も……」

何が起こっているのかと混乱する奈美——

奈美「(怒気)いいわよ！ あなたたち全員廊下に出て！ 反

省文も書きなさい！」

マンションの一室

テレビから小さくニュース音声（背景オフ扱い）。
アナウンサー「——情報省ネットワーク管理局が発表した、新宿に大規模な被害を及ぼしたデジモン、と呼ばれる巨大疑似生命体の出現は突発的な事であり、継続する事は無いという声明は、予算委員会で野党からの攻撃を受け、国会は現在混乱中です。事態を重く見た内閣は、責任追求をすると共に対策を検討していると幹事長が談話を発表しています」

ワイシャツ姿で、ベッド脇に腰を下ろし、力無く窓外を見つめている、山木（サングラスをしている）

山木「……」

PDA機横に置かれた携帯。小さく呼び出し音が鳴る。
山木、出ない。

ツー、ツー——。沈黙する携帯。

麗花の声「これから、どうするの？」

寝室ドアの横に立つ、部屋着の麗花。

山木「——人間に出来る事など、もう、ないんだ……」

麗花「（眉を顰め）そういう事じゃなくて、あなたがこれから——」

山木「人に出来る事……」

山木、PDAを手にする。

麗花「聞いているの？」

山木、ボタンを片手で操作しデータベース起動。

カードを横スクロールさせていき——

タカトとギルモンの画像。

山木「——（思案）」

教室

タカト、樹莉、ヒロカズ、ケンタ、それぞれの席で

黙々と反省文を書きつけている。蝉の声が高まる。

廊下／職員室前

礼をして出てきた四人。廊下にはジエンが待つていた。五人、揃って歩き出す。

職員室

テストの採点をしていた奈美、疲れて赤ペンを放る。

奈美「（嘆息）」

視線を脇のノートへ。

奈美「——」

反省文、と題されたタカトの字。

横目で斜め読み始める奈美。

タカト「（モノ）いつも先生の授業、つまらない訳じゃないんです。でも——」

奈美「（不機嫌そう）」

タカト「（モノ）僕たちは明日から学校をお休みします。反省文じゃなくて、欠席届けになっちゃってすみません」

奈美の表情、サツと変わって、次のノートを見る。

樹莉「（モノ）誰も行った事のない世界に出発します」

もどかしげに次のノート

ヒロカズ「（モノ）俺たちが行かないと、もっと大変な事が起こ

っちゃうかもしれないし——」

ケンタ「（モノ）テストの平均点、僕がいないと下がっちゃうか

もしれないけど——」

奈美「（小さく）——何よ……」

校庭／正門前

歩き出ようとしている五人。

奈美「（オフ）待つて！ 待ちなさい！」

立ち止まり振り向く五人。

スリッパのまま息を切らして駈けてくる奈美。

タカト「——先生」

奈美「（息絶え絶え）何——、これ何なの？ あなたたち——」

タカト「言いたい事は、全部書きました」

奈美「——デジモンと一緒にいた子どもたちって——」

テリアモン「（ジエンの肩越しに）ぼくの事あ？」

奈美「（絶句）」

樹莉「先生、勝手な事してごめんなさい。でも、黙って学校お休みするの、良くないし」

ヒロカズ「夏休みの間に行ければ良かったんだよな」

ケンタ「そんな都合良くいかないって」

奈美「——（激しく）いい加減にしてよ……」

黙る五人。

奈美「（混乱）何よ——、自分たちだけ勝手に決めて——あたしは先生よ？ そうでしょ？ そんな、子どもが勝手に旅なんて、そんなの家出じゃないよ！ そんな事あたし——あたしに何で話していくのよ！ あたし関係無いのに——あたしが何て言われると思って——」

タカト「——明日の朝、出発します。お父さん達には——、これから話します。だから——、明日まで先生、黙っててください。お願いします」

奈美「（顔をぐじゅぐじゅに崩して）——何よ……」

樹莉「先生——、ホントにごめんなさい。先生を悲しませたくない……」

テリアモン「もーまんたいもーまんたい」

奈美「え……？」

ジエン「無問題。問題ないです。僕たちは、絶対に帰ってきます」
タカト達、一礼して、門を出ていく。

奈美「——あたしは、何なの……？」

ギルモン・ホーム前/夕方

留姫も加わった六人の子どもとギルモン達がいる。
留姫「こんなところにあったとはね」

ジエン「ギルモン、出発するまでここに近づかない方が良いね」
ギルモン「うん、判ってる」

ケンタ「あゝ、親に何て言おう、っていうか言えないなあ……」
樹莉「ちゃんとお話ししなきゃ、駄目（自分に言い聞かせる）」
ケンタ「うん……」

留 姫「（ヒロカズらに）あんたたちはパートナーがいない。来
ない方がいいんじゃないかな……」

ヒロカズ「（むっ）俺たちは、デジタル・ワールドにパートナー
を探しに行くっていう目的もあるんだ。な」

ケンタ「うん」

タカト「——明日の朝、6時にここに集まるつ。向こうの世界が
どうなってるか、全然判んないけど、食べ物とか出来る
だけ準備しておこう」

頷く全員。

タカト「——じゃあ——、明日」

手を上げ、それぞれに立ち去っていく子どもたち。
残ったタカトとギルモン。

タカト「——（深呼吸）さあ、行こうギルモン」
ギルモン「うん？」

まつだベーカリー店内

買い物をしていた主婦が出ていく。

美 枝「毎度ー」

主婦、タカトらとすれ違い時にギョツとする。

美 枝「（息を呑み）——なっ、何？それ……」

タカト「お母さん……」

美 枝「た、タカト…… あんたって——」

奥から飛び出してくる剛弘。

剛 弘「——（愕然）これ……」
ギルモン「——タカトお……」

タカト「これはギルモン、僕が考えたデジモンなんだ。僕が考え
たデジモンが、本当にこの世界に現れてくれた。今は、
僕の大切な友達」

剛 弘「（呟く）段ボール……」

美 枝「なっ、何なのよこの恐竜、しゃべるし——、あ、あの怪物と一緒にやらないの？ やめてよ！」

剛 弘「美枝」

タカト「あ、あの、聞いて。僕達、明日から旅に出るんだ」

美 枝「聞きたくない！ やめて！」

剛 弘「（静かに、厳しく）美枝。タカトの話を聞こう」

美 枝「……（既に予感してポロポロ涙をこぼしている）」

タカト「この世界に現れたデジモンは、このギルモンだけじゃないんだ。友達のジェンや留姫にも、それぞれパートナーがいるんだ。それだけじゃなくって、クルモンという、可愛いデジモンがいた。クルモンは、ちっちゃい子どもみたいなんだけど、でも、何かとてつもない力を持っている。その力を狙って、強くて悪いデジモンが現れて、駅の向こう側とかを目茶苦茶にしちゃった」

黙って聞いている両親。

タカト「クルモンは、その悪いデジモンにさらわれて、違う世界に行っちゃったんだ。そう、デジモンたちがいる世界。

デジタル・ワールド、っていう……」

美 枝「——何で——、何でタカトが行かなきゃいけないの」

タカト「——行かなきゃいけない、っていう理由は——、クルモンは僕の友達で助けたっていう事。それに、クルモンがさらわれたら、またどんな酷い事が起こるか判らない。だから——なん、だけど……、でも——」

剛 弘「……」

タカト「本当は、僕、行きたいんだ。行かなきゃいけないんじゃないやなくって、僕、行きたいんだよ、デジタル・ワールドに」

美 枝「（愕然）」

タカト「——明日の朝早く、みんなと一緒に、僕、出発する。だから、パンをいっぱい持っていききたい。向こうに食べ物があるかどうか判らないから」

美 枝「あんた何言ってるのか判ってるの？」

タカト「——行かせて、ください」

美 枝「ふざけないでよ！ 学校だってあるし、そんな子どもだ

けで——」

剛弘「美枝」

美枝「何よ？」

剛弘「行かせて、やろうよ」

美枝「（信じられないと剛弘を見つめる）」

剛弘「俺も、どういうところにタカトが行こうとしているのかは判らない。だけど——、タカトは真剣だぜ。こんな真剣な顔、俺は初めて見た」

美枝「だって——まだ十歳なのよ……？」

剛弘「（微笑）昔なら、立派に旅が出来る歳だ」

剛弘、ギルモンの前に。

ギルモン「——タカトのお父さん、こんにちは」

剛弘「そうか、君がギルモンか……。タカトの友達がな、ギルモンのパンを作れって言ってたんだよ」

ギルモン「わあ、ギルモンのパン？ 楽しいね」

剛弘「うん、楽しい。今度作る——。（タカトをちらと見て）
たか——」

剛弘、さっと背を向ける。

タカト「お父さん……」

剛弘「——（嗚咽を隠し）絶対に、帰って来いよな。親不孝、すんなよ、な……」

美枝「（いやよ、と首を振っている）」

タカト「心配かけて、ごめんなさい。でも、僕たち、絶対元気に帰ってくるから」

美枝、タカトの前にさっと駆け寄る。

叩かれるのか、と一瞬思うタカト。

美枝、タカトを力の限り、抱きしめる。

声を上げて泣く美枝。

心の中で謝るタカト。

ジェンの部屋

椅子に座ったジェンの前に、ちょこんと立つ小春。
テーブルの上に、じっとしているテリアモン。

ジェン「――僕は明日から、旅行に行くんだ、小春」

小春「いいなー、旅行いいなー。誰と行くの？ お友達？」

ジェン「うん。それと――、テリアモンも」

小春「テリアモン？」

小春、テリアモンを見つめる。

テリアモン、ちよつと首を傾がせ、ニッコリ。

テリアモン「ぼく、小春と遊ぶの、結構大変だったけど、でもち

よつと面白かったなー。だから、寂しいけど……」

小春、テリアモンをただ凝視。

テリアモン「お父さん達には言わなくていいの？ ジェン」

ジェン「さっきメールを書いた。お父さんは絶対僕を止めるだろ

うからね」

小春「テリア、モン……」

テリアモン、小春を見上げる。

小春、テリアモンをぎゅうううと抱きしめる。

テリアモン「(苦しそう)ジェーン」

小春「テリアモン！ テリアモン！」

ジェン「――黙ってて御免、小春」

小春「(顔を真っ赤にして微笑み)ううん！」

と、テリアモンの耳を引っ張ってジェンに向ける。

テリアモン「ふにー……」

留姫の家ノダイニング・キッチン

ルミ子「？」

ワインを飲んでいるルミ子。やや酔っている。

廊下から、姿を見せる留姫。髪を下ろし、少女らしいワンピースを着ている。

ルミ子「――留姫ちゃん」

留姫「着てみた。似合う、かな」

ルミ子「やっぱり似合うよ。だってあたしの娘だもん」

留姫「――(微笑)」

黙って見つめ合う二人。思いは別々。

ルミ子「留姫、着てくれてありがとう」

留 姫「——ごめん」

留 姫、表情を消して去っていく。
ルミ子は微笑んで見送っている。

西新宿

夜が更け——、朝の青い空に——

中央公園

集まってくるヒロカズ、ケンタ、樹莉とレオモン。

それぞれ遠足時の様にリュックやバックパック装備。

ヒロカズ「おー、加藤おはよう！」

樹 莉「おはよー」

ヒロカズ「へへっ、俺さー、学校の行事だつて誤魔化してきた」

ケンタ「俺、言えなかった。ま、いいや手紙書いたし。加藤は？」

樹 莉「（俯き）うん……、あたしは、レオモンと一緒にだから」

レオモン「——樹莉の親を驚かせてしまった。すまない」

樹 莉「（元気に）ううん。あ、みんなあっちにいるよ！」

ギルモンホーム前

ジェンとテリアモン、留姫とレナモンも既に集まっ

ていた。樹莉達が来るのを見て

留 姫「あ、来た。タカトは？」

ギルモン「んー？ おかしいな、さっきまでいたのに」

タカト「（オフ）みんな集まったーっ？」

注視する一同。

タカト、手製の旗を持って走ってきた。

ヒロカズ「おっ、ティマーズの旗じゃん。盛り上がってきたね」

ジェン「じゃあ、出発しようか」

テリアモン「おっおー」

留 姫「！ ジェン、タカト！」

警戒した留姫の声の方に見るタカトら。

ジェン「あなたは——」

タイ無しシャツ姿の山木、立っていた。

山木「やっぱり、君たちは出発するんだな」

ジェン「——止めるんですか」

山木「——止めたって行くんだろ？」

タカト「（強く）行く」

山木、サングラスを初めて取る。意外に童顔。

山木「——本音を言おうか」

タカト「……？」

山木「俺は、君たちが羨ましいよ……」

タカト「——」

山木、ポケットからPSP機を出してタカトに渡す。

山木「向こうで使えるかどうかは判らない。だが、一応通信

手段は持っていた方がいい」

タカト「——（にっこりと）ありがとう」

山木「（ギルモンを見つめ）——ホント、羨ましいぜ……」

山木、去っていく。

ヒロカズ「おーし！ デジモンテイマーズ、デジタル・ワールド

に出发だあ！」

ギルモンホームの縦穴に入り——

横穴を進んでいく子ども達。

その奥には——、ゾーン

タカト達、ゴーグルやサングラスをして、中へ入っ

ていく。

N 「夏の終わりに、タカトたちテイマーズは、未知なる世界、

デジタル・ワールドに旅立って行った。どんな冒険が

タカトを待っているのか、それは誰にも判らない——」

以下次回